

社会人が「AP STATISTICS」で統計学を学んだら…

成蹊大学 中西寛子

1. はじめに

2015年4月27日のFORTUNEの記事によると、給与・仕事の将来性・満足度・ストレスの4項目のランキングで1位が「統計学 (Ph.D., Statistics)」、2位は「Master's, Biostatistics」であった。とくに仕事の将来性については他の学位を引き離す値である。世界が注目する統計学の素養は様々な形で現れ、ときにはデータサイエンティストという名に変えて必要とされている。

日本でも、ビッグデータの将来性と共に、統計学が重視され多くの書籍が発刊された。しかしながら、読み物とされる1冊を読んでも身につかず、書かれていることがわかりやすい反面、理論的には正しいのか？そのまま実践してもいいのか？など気になることが多い。

企業でも統計の重要性は理解され、統計学を学ぼうとする者による勉強会が企業内や企業間で行わるようになった。そこでの問題は、勉強会で使っている教科書の内容を解釈する際、大学で統計学を勉強した者がいないため、何が正しいのか？またはどこまで解釈していいのか？という議論になり、結論に到達しないことである。発表者も何度か立ち会ったが、統計を少々聞きかじっているという者に頼るところがあるが、決して完全なものでないため、(感覚的には正しくとも)説明が間違っている場面にしばしば遭遇した。

そのような中、2014年6月よりIT関連業界を中心とする社会人(11名)が集い、アメリカの高校生が使っている「AP STATISTICS (英文)」を使って統計を勉強することとなった。その内容は統計検定の3級～2級程度に相当する。たまたま集い勉強した社会人の勉強成果について報告する。

2. 勉強会の概要

参加人数：11人＋中西

期間：6回×3期(全部で18回、3週間ごとの土曜日午前中、約1年間)

勉強内容：AP STATISTICS の輪読(1回につき2人、約3時間)

各人が発表スライドを作成、発表する。

3. 評価

統計検定3級の過去問(2014年6月実施試験)の半分を1日目のガイダンスにおいて解いてもらい、1期後に残りの半分を解いてもらって比較した。結果については当日、詳しく述べるが、はじめの正解率の平均が0.65で、1期の後の成果率は0.94であった(データが取れなかった2名を除く9名の結果を利用した)。また、参加者の勉強法に対しての意見や実際の仕事への貢献についても報告する。

<参考資料> Best and worst graduate degrees for jobs in 2015 (FORTUNE)
<http://fortune.com/2015/04/27/best-worst-graduate-degrees-jobs/>